

留学・研究計画書

氏名 戸田 賢治	留学機関名 マラヤ大学 (Universiti Malaya)
留学先国名 マレーシア	留学期間 西暦 2007 年 7 月 ~ 2009 年 6 月
研究テーマ 英領マラヤにおける海峡華人の民族的アイデンティティの形成過程 ——反アヘン運動と華人ナショナリズムの考察を中心として——	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>英領マラヤの華人社会の歴史は、言語的教育的背景によって生じた文化に対する「原初的愛着」の違いを説明原理とする「英語派華人」と「華語派華人」という二分法によって独立的実体的な二つの華人集団を想定して言説化されてきた。この思考法は、言語的文化的な差異がお互いの理解を閉ざし異なる政治社会を生み出し争いの原因になることを前提にしていることが多い。一般的にこの「英語派華人」とは、18世紀以降の大量移民時代以前にマラヤに到来しマレー社会に現地化を果たした華人のことで、当時は「海峡華人 (Straits Chinese)」または「ババ (Baba)」と自称したり呼ばれたりした華人のことを指している。かれらは現地生まれであることによってイギリス国籍を与えられ英語教育にも参加していった。しかし、こうした背景だけを引き合いに植民地主義的な「英語派」として扱うことは歴史を曲解することになる。本研究では、「英語派」とされる海峡華人らが、イギリス植民地政府の支配構造の要であったアヘン政策に対して 1900 年代以降積極的に反対運動を推進した事実注目し、中国存亡の危機の原因をアヘンに見出し、いかに独自の華人ナショナリズムを形成して抵抗していったかを研究すると同時に、言語的教育的背景による歴史記述では捉えられない民族的アイデンティティの複数性を明らかにする。</p> <p>具体的に、インドー中国間のアヘン貿易の中間地点に位置するマラヤでは、一部の華人にアヘンの製造から分配までを請け負う徴税システムが植民地政府によって形成され、その収入は財源の半分を占めていた。しかし、1910 年に徴税請負システムから政府独占システムに再編成したことで、華人のネットワークから離れたために結果として収入は減少していく。この変化の背後には、1906 年始めに欧米で医学を修めた林文慶、殷雪村、伍連徳といった海峡華人を中心にしてマラヤ各地で結成された反アヘン協会の存在、またアヘン中毒患者の治癒や講演による啓蒙活動などの影響が大きいと考えられる。こうした流れを踏まえて、この運動が、清朝政府が生き残りかけた「新政」の一環として 1906 年 9 月から展開した禁煙運動と軌を一にしており、中国本土との関連があったかを明らかにする必要がある。また、アメリカに渡って医学を修めた殷雪村が運動で重要な役割を果たしていることから 1905 年当時アメリカで生じた華人の愛国的な反アメリカ運動による米製商品のボイコット運動の影響をどれぐらい受けているのか、この関係性にも注目する必要がある。新しい華人ナショナリズムの国際的な広がりの中に現れた独自の華人ナショナリズムとして位置づけられるのではないかと考えている。さらに、同時期の日本やアメリカといった後発帝国がそれぞれ占領した台湾やフィリピンで行った反アヘン政策の国際的な影響力も視野に入れてさまざまな角度から反アヘン運動の力学を明らかにしていく。この研究を通して海峡華人の民族的アイデンティティの複合性を明らかにしていくとともに、マラヤ各地の華人集団を結びつけた反アヘン運動の意義をナショナリズムとの関係性で明らかにしていく。</p>	

成果報告書

記入日 2009 年 9 月 1 日

氏名	戸田賢治	留学先国名	マレーシア	所属機関	マラヤ大学
<p>研究テーマ： 英領マラヤにおける海峡華人アイデンティティの形成過程—20 世紀初頭の反アヘン運動の考察を中心として</p>					
<p>留学期間： 2007 年 8 月 ~ 2009 年 7 月</p>					
<p>2007 年 8 月から 2009 年 7 月にわたり、マラヤ大学大学院の歴史学科に所属し、英領マラヤ時代における海峡華人 (Straits Chinese) のアイデンティティ形成を 20 世紀初頭に盛り上がりを見せた反アヘン運動の考察を通して研究してきた。マレーシアでの貴重な 2 年間の留学期間を①経験と②研究実績の 2 点に焦点を当ててご報告させていただく。</p> <p>留学経験：</p> <p>小生の留学は、マレーシア独立 50 周年の佳節に当たり、さまざまなイベントが各地で盛大に開催されるという国民的な熱狂の中で始まった。マレーシアのアブドラ前首相や各州の全スルタンが一堂に会しての独立記念式典に運よく参加することができ、5 代の首相の特徴をまとめた文化祭の多彩な演目を目の当たりにしながら、生き生きとしたマレーシアの半世紀の歴史的絵巻を通じてどのような総括をしているのか国家的な認識として知ることができた。また同時に 100 周年に向けて出発した今後のマレーシアが多民族国家としての課題をポジティブに資源として活用していこうとする姿勢も読み取ることができ、有意義なスタートを切ることができた。</p> <p>具体的な研究は、マラヤ大学での受け入れを快諾してくださった歴史学科教授で社会人文学部副科長の Danny Wong 教授の取り計らいで、大学院生が博士論文を書くためのワークショップに参加することから始まり、その客員教授として赴任されていた著名な東南アジア研究家の Andaya 教授の指導を受ける機会までいただいた。また、それはマレーシアをさまざまな角度から研究する地元の大学院生と知り合う機会ともなり、有意義な留学生活のスタートを切ることができた。その折に知り合ったケンブリッジ大学出身の Neil Koh 博士は、同じ研究分野の先輩として海峡華人研究の上での重要な資料のアクセス先や研究大会の情報を共有してくれただけでなく、常に刺激を与えてくれた。</p> <p>Neil Koh 博士の紹介により、2007 年 10 月にペナン島で開催された『Baba コンベンション』という自身をババやニョニヤだと自覚するマイノリティが消滅の危機に瀕しているババ・ニョニヤアイデンティティを再構築するために集う大会に参加する機会をもつことができ、現在のマレーシア華人社会を研究する視点を与えてくれた。</p>					

一つ指摘できることは、その大会を主催する組織は植民地時代に発足した海峡華人英国籍協会(1900年)を継承する組織であり、現在ではシンガポール、マラッカ、ペナンの連綿と続く従来の主要ネットワーク地域を超えて隣国のタイ・プーケットの海峡華人のネットワークを新たに加えるグローバルな運動に成長していることである。海峡華人は歴史的に現地化した集団であり、中国系の言語ではなく英語を主要言語とする教育を受けているケースが多いので学歴や社会的地位の高い人たちが多数参加していた。また各地域の出し物もババやニョニヤの文化を次世代に継承しようという目的をもっていた。こうした、現在にも流れる海峡華人アイデンティティとはどのような形成過程を経てきたのかさらに調査する動機を高めることができた。

研究実績：

① 研究究目的 20世紀前後に英領マラヤの華人は、アヘンの使用に対して根本的に撲滅していこうとする運動を実施する。アヘンはイギリス政府にとって植民地経営における重要な財政資源であったため、アヘンを問題視して取り上げること自体が反政府的な行動に受け取られる難しい問題であった。この困難な運動の中心を担ったのが、西欧で教育を受けた植民地政府の役人であり華人社会の指導者でもある海峡華人らであった。つまり植民地経営に携わる華人らが反アヘン運動をどのような力学で支え展開したのかを解明することで、これまで海峡華人に付随する植民地政府側に立つ単純で単一的な英語派華人的なイメージを払拭し、さらに詳しく海峡華人のアイデンティティを明らかにしていくことができると考えた。

②研究資料 植民地期の研究であるため、アーカイバル・リサーチ(古文書調査)を主とする研究になり、資料は公文書と新聞・雑誌である。ただし、マレーシアの国立文書館においてはさまざま資料の保管状況が悪く、あるものは長期保管に適したマイクロフィルム化された資料さえ内部が酸化して異臭を放つような有様になっていたり、またシリーズものの資料も一部散逸し統一されていなかったりと大変苦労させられた。特に公文書についてはシンガポール図書館とシンガポール国立大学に赴いて資料収集にあたった。主要な資料は下記の通りである。

・ Proceeding of the Commission Appointed to enquire into matters relating to the use of opium in the Straits Settlements and the Federated Malay States, Reports and Annexes, Vol.1-2, 1909, London: Government Printing Office.

・ Proceeding of the Commission Appointed to enquire into matters relating to the use of opium in the Straits Settlements and the Federated Malay States, Analysis of Evidence and Appendices, 1908, Singapore: Government Printing Office.

上記の公文書は、1907年に英領マラヤにおいてアヘン調査委員会が発足し、(1)アヘンは広がっているか、(2)適度か過度か、(3)政府によってとられるべきことは何か、という視点でヨーロッパ人33人、華人53人の合計86人に対するインタビューの記録であり、1300ページを超える膨大な資料であり、本研究の主要な資料である。

・ The Straits Chinese Magazine, Vol.1-11, 1897-1907(以下『海峡華人誌』とする)。

これは、同時代のグローバルなニュースや知識、また文学作品などを現地社会に啓蒙していこうとする海峡華人エリートによる編集季刊誌である。特に創設者の中心であるリン・ブンケン

(林文慶、1869-1957) は医者としての立場からアヘンを政府の問題として告発する文章を寄稿し、反アヘン運動においても中心的な役割をもっていた。

③研究内容：

(1) 当時のアヘン問題認識

20 世紀前後のアヘン認識は、さまざま先行研究の範囲で理解を深めることができた。特に反アヘン意識のグローバルな拡大に関して言えば、アヘン問題が国際的な問題へと格上げされていくのに大きな役割を果たしたのは日本とアメリカである。日本による台湾の植民地化やアメリカによるフィリピン占領の過程で厳格なアヘン規制が行われたことは、イギリスによるアヘン利用の植民地経営を国際世論のなかで厳しい立場に追い込んでいったとされる。ただし、英領マラヤにおいてイギリスはアヘンを華人の「私的領域」の問題であるとして、「国家領域」の問題と認識しようとしなかった。つまりアヘンを医療目的ではなく娯楽に使用するのは華人の生得的な問題として片付け、植民地統治の財政資源確保のために確立されていた徴税請負制度の販売規制を行おうとする姿勢はなかった。こうした「国家」の保護に依存できない状況に、あえて「私的領域」の問題として自力で解決していこうとする存在が海峡華人であった。

(2) 反アメリカ運動と反アヘン運動

なぜ、グローバルに「国家領域」の問題に発展している時期に、海峡華人らは「私的領域」の問題として解決しようとしていったのかは、当時の歴史的な文脈のなかで把握する必要がある。今回の調査で当時発行されていた『ストレーツタイムズ』英字新聞 20 年間分 (1890-1910) や『海峡華人誌』に目を通し、反アヘン問題意識が発展する契機の前後でどういった事件・問題が生じていたかを調査した。当時、アメリカは「反アヘン国家」としての顔を持っていたが、同時に「排華政策」(労働華人移民禁止) の更新 (1904 年) やサンフランシスコ大地震時 (1906 年) おける人種差別的な対応をしていたということから華人にとっては受け入れがたい二重の顔をもっていた。この 1904 年前後の事件に映るアメリカの背反的な部分に最も屈辱を受けたのは西洋で教育を受けた英領マラヤの海峡華人であり、特に医学を修めた華人はアヘン問題を自ら解決することが最大の抵抗と捉え反アヘン運動を展開していったといえる。この「アメリカ問題」と絡めて「アヘン問題」に言及する華人の文章も多いことから証明できる。さらにこの華人の反アヘン運動がインドネシアや上海ともリンクしており、グローバルな運動に展開されており、華人ナショナリズムとして理解する必要があると考えている。ただし、どんな特徴をもったナショナリズムの運動なのかをさらに分析した。

(3) 海峡華人の反アヘン運動と代償ナショナリズム

今回の調査で焦点を当てている海峡華人の反アヘン運動はどのような力学によって支えられていたのか特徴を三つにまとめた。

① 西洋人プロテスタントによって開始されたアヘン貿易撲滅運動との連携。

アヘン貿易撲滅協会会長である J. G. アレキサンダーはマラヤを訪問した折、精力的に各地を

訪問し現状を視察しながらアヘン問題の認識を深めるとともに、講演などを積極的に催し現地の海峡華人らと交流を図っている。この協会の宣教師や牧師、また議員らはこの問題意識を本国のイギリス議会で強く発言していく機能を果たしており、海峡華人らにとっても強力なパートナーとしてこの協会を利用し、反アヘン運動の効果を拡大していったといえる。

② 運動の指導者の海峡華人が医者であったことから吸引撲滅運動を開始。

マラヤの反アヘン運動は、アヘン貿易を撲滅するだけでは不十分だとの認識に立ち、アヘン吸引自体を撲滅し、華人は薬物自体から解放されるべきだと「治療」の観点で独自の運動を展開していった。医者であったリムとイン・スアチュアン（殷雪村、1877-?）は、1906年8月にアヘン治療院を創設しており、その方法は患者を入院させ医療と食糧を無料で与えながらアヘンを断たせる隔離政策である。同時にこうした根性論的な方法だけではなく、科学的な治療法を生み出すためにさまざまな実験を試みている。アヘン吸引は華人の生得的な習慣とみならず欧米からの人種還元論的な視点に抵抗するため、自らの力でアヘン吸引を断つための支援運動を展開していった。反アヘン運動を私的な領域で解決することで、華人社会への国家的な干渉を防ぐと同時に、華人に対する強い人種偏見を見直させようとする試みでもあった。

③ 海峡華人による中国救済の代償ナショナリズム。

リムやインは欧米で医学の学位をとり、近代的な知識や技術を旺盛に吸収した海峡華人である。彼らの反アヘン運動への取り組みは、単なる医者という動機からのみ発せられておらず、まず「華人」という要素が大きいと考える。もともと中国語はできなかつたリムが学習を開始して中国指向に傾斜していくのはイギリス留学直後のことであり、イギリス留学で自身を華人と自覚させられる経験が大きいと考える。リムは、中国が存亡の危機になった原因をアヘンと認識し、このアヘン問題をマラヤで解決することが最終的に中国を救うことになることと力説している。また彼のアヘン吸引を撲滅させようとする運動が近代化路線での教育改革や衣食住を基本とした生活改革など広範にわたっており、「東洋と西洋の調和」を海峡華人の使命としていた。こうしたリム自身の部分的に喪失した華人アイデンティティやエスニック的な連帯から切断されていた状態を、自身の自己転形として得た近代的な装いをもって一挙に埋め合わせていこうとする運動は、「代償ナショナリズム」(A. D. スミス)という言葉が適切であると考えられる。反植民地主義、また排外主義という形式をとらず、イギリス植民地経営を変革していく代償ナショナリズムのなかに海峡華人の独自性があると考えている。

英領マラヤにおける海峡華人の反アヘン運動は、広義で華人ナショナリズムである。ただし、国家の支援や政策に甘んじることなく自力の更生や治療という当時では斬新な視点で運動を展開したり、西洋人プロテスタントの協力も利用したりする部分では、西洋で教育を受けた海峡華人の合理性が表れており、これまでの運動にはない海峡華人の独自性として指摘できる。こうした背景には、自己転形として得た近代化によって中国の再生を成し遂げようという動機が運動の原点にあり、反アメリカ運動による華人ナショナリズムの影響があるとはいえ、反アヘン運動は

海峡華人の代償ナショナリズムという特殊な力学によって展開され、効果的に運用されたといえる。

④ 今後の課題 海峡華人のアイデンティティは、「英語派華人」という植民地側に分類される単一的な枠組みに当てはめられ強化されることで、こうした「近代化」と「華人」という狭間に揺られながら発展させてきた複雑でユニークなアイデンティティ形成の歴史が埋もれてしまってきた。反アヘン運動は海峡華人アイデンティティが複雑に形成されてきたことの一例に過ぎないが、今後はさらに海峡華人の他の改革運動に焦点を当ててさらに分析を加えると同時に、なぜ海峡華人ら「英語派華人」という「植民地人」的なイメージで語られることが多いのかについて研究していきたい。現段階では日中戦争開始当時、マラヤの華人社会は中国支援をめぐって大きく二つに分裂しており、その時代の産物ではないかと推測している。それは具体的にイギリスから多大な保護下（イギリス国籍）にある海峡華人らは日英同盟の縛りから容易に中国に資金援助などできる状況ではなかったため、中国救済が華人として当然の行為とみなされる時代に、多くの反発を受けたためではないかと考えている。

また同時に、こうした海峡華人のアイデンティティ形成の変遷を追うことを通じて、民族的なアイデンティティがいかに関数の要素のなかで生成しているかを明らかにすることを今後の研究課題としたい。